マアナゴ

生態的特徴等

【生態】

日本沿岸のほぼ全域に分布し、水深 300m 以浅の砂泥域を生息域とする。

産卵場は沖ノ鳥島南方沖の九州・パラオ海嶺付近とされ、葉型仔魚（レプトセファルス幼生）は黒潮によって各地の沿岸域に輸送される。葉型仔魚は「のれそれ」と呼ばれ、沿岸漁業の漁獲対象となる。その後、静穏域で変態して底生生活に移行し、沖合等に分散・移動する。

幼魚はヨコエビ類を、成長後は魚類を主に捕食する。常磐海域には雄はほとんど分布しないとされ、1 歳で全長 30～55cm、２歳で 35～80cm、３歳で 50～80cm 程度となる。常磐海域では 13 歳魚が確認されている。

【漁法と盛期】

茨城県では主に底曳網（沖底・小底）で漁獲される。葉型仔魚は船曳網で漁獲される。

【利用】

煮アナゴ、天ぷら、かば焼きなどの原料として利用されている。

資源水準は低位、動向は減少傾向	水　準
（漁獲量）漁獲量は、H６年から H26 年までは概ね 100～200 ㌧で安定しており、H27 年に 296 ㌧まで増加した。その後は減少傾向に転じ、R５年は 51 ㌧の漁獲まで減少している（図１）。 （水準と動向）資源水準は、県内で漁獲割合の高い沖底及び小底５t 以上の漁獲量から計算した CPUE（kg/隻・日）から判断した。水準は「低位」、動向は直近５年間の CPUE の傾向から「減少」と判断した（図 2）。	△
	動　向
	↘

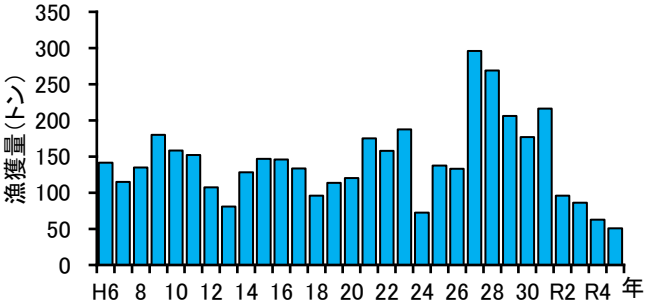

図１　茨城県のマアナゴ漁獲量（水試システム、属地）

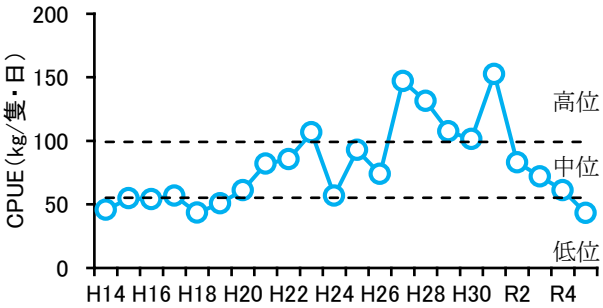

図２　茨城県のマアナゴ CPUE
（水試システム、沖底＋小底 5t 以上、属地）

【全国の漁獲動向】※アナゴ類としての集計

・長崎県が漁獲量１位、２位は島根県、３位は宮城県。（R３農統）

評価期間：令和５年１月～令和５年 12 月　更新日：令和６年３月 27 日

引用：水産研究・教育機構水産資源研究所底魚資源部、宮城県水産技術総合センター、福島県水産資源研究所（2021）マアナゴ太平洋北部（宮城県～福島県）．令和３（2021）年度資源評価調査報告書、水産庁・水産研究・教育機構、東京 8pp、https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2021/trends_2021_19_r.pdf.

石田敏則・山廼邉昭文・後藤勝彌・片山知史・望岡典隆（2003）常磐海域におけるマアナゴについて．福島水試研報、11、65-79.